

栄一さん、こんにちは

7月3日、20年ぶりに新しい紙幣（日本銀行券）が発行された。自販機の更新などコストがかかるという側面があるものの、新紙幣発行の理由として、①偽造防止対策の強化、②ユニバーサルデザインの導入、が挙げられる。過去20年間で印刷技術が大きく向上したが、偽札防止のため、3Dホログラムや高精度のすき入れなどの高い偽造防止技術が施されている。まさに、今回の新紙幣には世界最高の技術が盛り込まれている。

日本の紙幣の歴史は約400年前に伊勢で生まれた「山田羽書」に始まるが、今回の新紙幣発行で新たな1ページが加わった。とはいえ、キャッシュレス決済がコロナ禍の下で一気に4割弱まで普及したほか、インフレ復活や金利のある世界となったことで23年12月以降、日銀券発行残高は減少傾向にある。もちろん、今なお現金需要は根強いが、仮に中央銀行デジタル通貨（CBDC）の発行が始まった場合、これまでのように20年ごとの新紙幣発行は続くのだろうか。

さて、今回の紙幣は1万円札：渋沢栄一、5千円札：津田梅子、千円札：北里柴三郎、といった顔ぶれだ。渋沢は銀行家・実業家、津田は教育者、北里は医学者であるが、いずれも次世代を担う人材を育てた、という面で共通点が見出せる。津田、北里はその名を冠する大学が存在するほか、渋沢も商法講習所（現在の一橋大学）の運営、日本女子大学校（現在の日本女子大学）の創立などに大いにかかわった。

また、新1万円札の顔である渋沢については、21年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」の主人公だったほか、出身地や自宅のあった自治体、所縁の団体などがプロモーションしていることで認知度が高まっている。農民出身ながら幕臣となった渋沢は、新政府発足間もない大蔵省に出仕した後、第一国立銀行（現在のみずほ銀行）を設立、その総監役（のちに頭取）を務めたことを皮切りに、500近い企業の設立・運営などに携わったことから、「近代日本経済の父」と呼ばれている。「もしトラ」の元ネタ「もしドラ」で有名な経営学者ピーター・ドラッカーも渋沢の思想が日本の経済発展に大きく貢献したと高く評価している。

渋沢は公益の追及に向けて資本・人材を最適に配置し、事業を推進する「合本主義」を提唱、実践してきた。その根底にあるのは「道徳経済合一」という思想である。昔から金儲けは穢いもので、それを生業とする商人もまた卑しい、といった価値観が浸透していた。実際に真っ当に商売をしたのでは儲からないと考える商人も少なくなく、「三方よし」の近江商人ですら陰口を叩かれていたらしい。しかし、渋沢は「信用」を重視し、商売繁栄の根底と捉えた。企業の目的が利潤追求にあるとしても、その根底には道徳が必要であり、正しい方法で稼ぐことで、国や社会、そして国民が豊かになることに責任を持たなければならない、と考えた。そうした強い意志を持って、渋沢は私財を養育院の設立や国際親善などに投じるなど、生涯をかけて社会事業にも積極的に取り組んだ。

昨今、企業にはSDGsへの取り組みなどが求められているが、資本を提供する株主だけではなく、労働力を提供する被雇用者に対しても十分配慮すべきといった意見も散見される。まさに、「合本主義」は「人的資本経営」に通じる考えであるわけだが、それを一過性のブームで終わらせない努力が求められている。

（（株）農林中金総合研究所 理事研究員 南 武志・みなみ たけし）